『しろばんば』あらすじ

◆前編【一章】

大正四、五年頃、伊豆半島天城山麓の湯ヶ島。村の子供たちは夕方になると、しろばんば（下の写真参照）を追いかけて遊ぶ。小学校二年生の洪作は、いつも仲間たちがすべて帰ってしまった後、一人でおぬい婆さんの待つ土蔵へと帰る。

洪作は五歳の時から両親と離れ、血のつながりのないおぬい婆さんと二人で、土蔵の中で暮らしている。近くには実の祖父母とその家族が暮らす"上の家"があるが、洪作にとって、おぬい婆さんと二人だけの生活は結構楽しい。

◆前編【二章】

二年生の春、母の妹のさき子が沼津の女学校を卒業して上の家に帰って来る。洪作は毎日のように、さき子のお供をして西平の湯へ出かける。まもなく、さき子は小学校の先生になる。

一学期の最終日、洪作は袴をはいて学校に行き、上級生にいじめられる。同じく袴をはいてきて上級生にいじめられた浅井光一は、石を投げつけて反撃する。

小学校の校長をしている門野原の伯父の家に泊まりに行くが、すぐに逃げ帰る。また、洪作はさき子と西平の湯に行くが、その帰り道、さき子は天城神社の境内で、中川先生とデートをする。

◆前編【三章】

洪作はおぬい婆さんと一緒に、両親の住む豊橋に行くことになる。多くの村人に見送られ、馬車に乗って大仁へ、そこから軽便鉄道に乗り換えて沼津へ向かう。駅前の旅館で一泊し、汽車に乗って、豊橋に着く。数日間滞在し、帰る前日に母と一緒に街へ買い物に行き、迷子になるという事件を起こす。

◆前編【四章】

二学期、洪作は渓谷楼にいる榎本先生のところへ勉強しに行くようになる。その頃、さき子と中川の恋愛の噂が村に広がる。二人は毎日デートを重ねる。

十一月には、子供たちが楽しみにしている神楽と運動会がある。十二月、さき子の妊娠の噂が広まり、二学期の最終日に中川の転任が発表される。さき子と結婚した中川は、三学期が始まる前に、一人で新しい赴任地へと去っていく。

◆前編【五章】

三年生の四月、洪作たちは筏場へ馬飛ばし（草競馬）を見に行く。さき子が赤ん坊を産みかけていると聞き、その様子を見るために駆け戻る。深夜、さき子は男の子を出産する。

五年生の正吉が神かくしに遭う。正吉は三日後、天城山麓の杉林の中で発見されるが、その様子を見に出かけた洪作は、途中で幸夫とはぐれ、自身が杉林の中をさまようという事件を起こす。

◆前編【六章】

上の家の曾祖母のおしな婆さんが亡くなる。葬式のために母の七重が豊橋からやってくる。曾祖母を熊野山の墓地に葬る。母と西平の湯へ出かけ、体を洗ってもらう。十日ほど滞在して豊橋に帰る母を見送り、洪作は淋しくなる。

久しぶりにさき子と西平の湯へ出かけるが、さき子の体は蝉のように蒼白くやせている。間もなくさき子は肺病になり、上の家の二階に閉じこもる。

◆前編【七章】

おぬい婆さんと沼津に行く。一日目はおぬい婆さんの血縁の者に会い、駅前の旅館に泊まる。翌朝、母方の親戚の"かみきの家"に行き、蘭子、れい子の姉妹と千本浜へ遊びに行く。れい子におごってもらって買い食いをし、腹をこわしてかみきの家に一晩泊まる。

◆前編【八章】

洪作は夜半にふと目を覚ます。さき子がこっそりと西海岸の夫の任地へと旅立つ。洪作は、それを悲しく見送る。

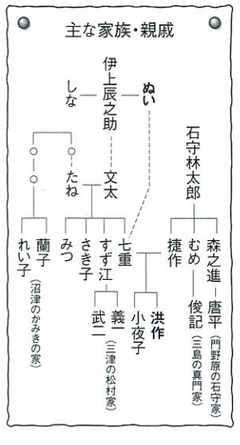
夏休み、さき子の訃報が届く。さき子の葬式が行われる日、洪作や幸夫など二十人ほどの子どもたちは、念仏を唱え、さき子から教わった唱歌を唄いながら、天城峠のトンネルへと向かう。

"しろばんば"って何？

（川田五十六：撮影）

晩秋の夕方、低くゆっくりと飛ぶ、白く小さい虫（雪虫）のことです。伊豆地方ではこの虫を"しろばんば"と呼びます。

主な家族・親戚



「かんざぶと」から見た大正時代の湯ヶ島（林良平：撮影）

◆後編【一章】

五年生の夏休みが終わる頃、御料局（帝室林野管理局天城出張所）の新所長の娘であるあき子が湯ヶ島にやって来る。あき子のことをはやし立てる歌がはやり、洪作は腹をたてて下級生を殴ってしまう。しばらくして、洪作は所長さんの家に朝顔を届けに行き、美しいあき子の表情に魅せられる。

九月の終り、台風が来る。ある日、御料局の前であき子に話し掛けられるが、洪作は満足に答えることができないまま家に帰ってしまい、後悔する。

◆後編【二章】

学校へ羽織を届けに来たおぬい婆さんの姿に、洪作は老いを感じる。それからしばらくして、洪作はおぬい婆さんと共に、おぬい婆さんの故郷である下田に行く。

いとこの唐平と共に、棚場に住んでいる父方の祖父である椎茸爺さんのところへ行く。洪作は祖父の人柄に接し、心から尊敬する。

◆後編【三章】

数日後、作文の題材選びのことであき子に誤解される。提出した作文が落選し、教師に嫌味を言われた洪作は、一人で熊野山に登る。そこで若い男女の接吻を目撃し、殺人だと勘違いする。

冬休みが近いある日、生徒たちが登校前に行うランニングの途中で、あき子が落とし穴にはまる。洪作は紋太とけんかになり、紋太を石で殴り傷つけてしまう。この事件の後、洪作はあき子に惹かれる気持ちを失う。

◆後編【四章】

年の暮れ、かつて洪作の尊敬していた上級生の平二がみすぼらしい姿で帰郷する。正月、バスが初めて村に入って来る。馬車曳きの兵さんがバスのことで口論に負ける。洪作は、そうした落ち目の人たちに心を惹かれる。

どんどん焼きがすむと、子どもたちは小鳥獲りのわなをしかけて遊ぶ。わなにかかったひよどりの屍体を見て突然泣き出すあき子に、洪作は当惑する。女の子というものを違った目で見るようになる。

◆後編【五章】

六年生になる春休み、受験参考書を買いに二人で沼津へ行く。かみきの家の蘭子とれい子が派手なけんかをする。洪作は蘭子と千本浜に出かけ、啄木の歌を唄う大人びた蘭子に好意を持つ。

新学期、受験勉強にとりかかる。バスが開通する。五月、母七重が来て、近々母屋に移り住むことを宣言する。伯父の石守校長が退職する。洪作は、新校長の勧めで、犬飼先生のもとへ勉強しに行くようになる。

◆後編【六章】

母が母屋に住むようになり、洪作も土蔵から母屋に移る。母とおぬい婆さんが言い争いをする。

八月、三津の親戚の家に遊びに行き、その家の兄弟たちと毎日海で泳ぐ。しばらくして、蘭子がやってくる。子どもたち四人で三島にある父方の親戚の真門家へ行き、花火を見る。

犬飼先生の神経衰弱の噂が広まる。

◆後編【七章】

学校に出て来なくなった犬飼は、洪作を浄蓮の滝へと誘い、自殺しようとする。翌日、犬飼は入院させられるため、湯ヶ島を去る。

おぬい婆さんが床につくようになる。日に日に弱っていき、正月十日過ぎに亡くなる。前日まで熱を出していた洪作は、上の家の二階からおぬい婆さんの葬列を見送る。

二月、洪作一家が浜松へ出発する前日、洪作や幸夫など二十名を越す子どもたちは、おぬい婆さんの墓参りをする。

◆後編【八章】

湯ヶ島の最後の夜、洪作は、仲間の幸夫、芳衛、亀男と共に西平の湯へ行く。

翌日、多くの人々に見送られ、バスに乗って湯ヶ島を後にする。途中の大仁駅前の通りで、洪作は、楽隊の音楽に侘しさを感じ、一人たたずむ。

挿し絵は中央公論社『しろばんば』初版本より（小磯良平：画）